地域コミュニティ交通の課題と展望

2020 年 8 月 25 日
合同会社ロコムテック
代表社員　岩崎正昭

1．　現在の状況

A)　8 月 28 日都市計画課と今後の進め方について打ち合わせ
コミュニティカフェ荻野土谷代表理事
合同会社ロコムテック

B)　方向として（前場担当課長からの話として）

- 都市交通としてではなく福祉政策の一環として位置付ける
- ９月予算で審議
- 本格運行は 3 年を見込む
- 地域への横展開は未定だが、地域コミュニティ交通を導入するには地域に導入母体を設けたい。地域コミュニティ交通審議会のような組織の構築を考えている

2．　課題

C)　行政が行う事業ですから、無料でなく利用料金 100 円は妥当な金額だと私は思いますが、事業経費の１０％程度しかならない。

D)　利用料金をいただくと、法律による路線の縛りはいり、柔軟に変更することができない。

E)　地域コミュニティ交通の経験のあるコミュニティカフェ荻野や合同会社ロコムテックの事業地域は、地域コミュニティ交通の運行が可能であるが、その他の地域に導入母体をつくるには、経験を伝える指導的組織が必要になる。

・助手の手配、会計の仕組み、運賃の管理、利用者への対応、

F)　福祉事業として福祉部門に運行を任せても経験がない。むしろ交通政策部門に福祉的役割を持っていただくのが交通行政との整合性が取れるのではないか。

3.　将来への展望

G)　地域コミュニティ交通は、定時定路線なので、自動運転に向いていると思うので、導入のための課題検討が必要になる。

H)　厚木市の福祉交通政策として、本格的に取り組むには、中心的役割をもつ部署（地域包括ケアセンターのような）が必要になる。

I)　自動運転が本格導入されたとき、地域に車の共同利用会社を設立して、知り合い同士が利用するのであれば、安心感があり、地域コミュニティ交通を利用しない層にも広がる可能性がある。

以上

厚木・愛川・清川版掲載号：2020年９月４日号

厚木市コミバス継続運行へ 地域密着の交通手段めざす

昨年度に実証実験を行ったコミバスの様子

地域コミュニティ交通システム導入に向け、厚木市内荻野地区で昨年・一昨年度と行われたジャンボタクシーによるコミュニティバスの実証運行。厚木市ではこのほど、同地区でのコミュニティ交通の定着に向け、２０２３年度末までの長期間の継続運行の実施を計画し、９月補正予算にコミュニティ交通運行事業費３３１万８０００円ほかを計上した。

本厚木・愛甲石田と、駅を中心に　放射線状に密度の濃いバス路線を形成する厚木市。その中でもバス利用が不便な地域や、駅などへのアクセスではない高齢者の日常生活に必要な近距離移動の交通手段の確保を課題とし、昨年・一昨年度と荻野地区（鳶尾・まつかげ台・みはる野）でコミュニティバスの実証運行を実施してきた。

これまでの実証運行の結果、駅から遠い高齢者の多い地域でも、利用者数としてはそれほど多くないが外出に不便を感じている一定数の利用も確認されている。またスポット的な実証運行ではなく、年間を通じた継続運行で地域に定着した交通手段とすることで、最終的な導入に向けての可否を判断することとなった。

来年１月からを予定

継続運行は来年１月からを予定。料金は昨年の実証運行と同じく１００円を予定する。また、これまでの実証運行の結果や意見を踏まえ、鳶尾ルート、まつかげ台・みはる野ルートとしてきた２ルートの見直しをはじめ、運行日数や夕方の利用者の少ない便を減らすなど、適宜見直しを図っていくという。

コミュニティ交通を担当する市まちづくり計画部・都市計画課では「夏にやってほしいという意見もありました。年間を通じた継続運行をすることで、コミュニティバスが本当に地域に密着していけるかをしっかりと見極め、地元と話し合いながら地域の特性に合わせた持続的な運行へ繋げていきたい」と話した。

今回の継続運行実施に向け、市では９月補正予算にコミュニティ交通運行事業費（３３１万８０００円）とコミュニティ交通運行管理事業補助金（30万１０００円）を上程。委員会等の審議を経て、最終日の10月６日に採決が行われる。

https://www.townnews.co.jp/0404/2020/09/04/541274.html